
魔法先生ネギま 私と千雨と、ときどきスタンド

abs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま 私と千雨と、ときどきスタンド

【Nコード】

N5749V

【作者名】

abs

【あらすじ】

ネギまにスタンドを出したくなった・

主人公はネギの妹。他にスタンド使いは出てこない・
ぼくのかんがえたさいきょーのスタンドがでるかも、
TSで転生系？

久々の更新でよく分からない回up
次回投稿はいつになることやら

1 話目 役に立たないスタンド（前書き）

次の更新は1ヵ月後かな

1 話目 役に立たないスタンド

女性になりたかった

理由は、自らの周りに女性がないから。

自分を女性とすることで、一人身の寂しさを紛らわせたかった。

だから、次は女性になることを望んだのだ。

男の記憶を残しながら、女性になる。

それを望んだ。

前世の記憶は胎盤の中で無くなる。
はずだった。

人間の脳のシナプスは1歳半が一番多く、それ以降は、シナプスを整理、削除を行い、脳の成長を行う。

よって、それ以降は、脳に物理的な障害が無い限り、記憶を失うことは少ない。

なぜか、記憶は残り続け、前世から意識が続いていた。

そして、その記憶はここが物語の世界であることを教えてくれた。

夢かもしれない。だけど、私はここで、自分で考えることができる。

我思う、ゆえに我あり。

周りの世界は全て嘘かもしれない。それはどうやっても確かめられない。

しかし、唯一、正しいものがある。

嘘かもしれないと思う心は必ずある。

我思う。ゆえに我あり。

様々な物語でAIが自我に目覚めるきっかけでもある言葉。

だから、私も望みが叶った世界で生きたいと思った。

ユズ・スプリングフィールド

新しい名前。イギリス人なのに、ユズってどういうことだ。

そして、二卵性双生児の兄の名前は、ネギ・スプリングフィールド。

災厄の魔女に似るであろう女の子。

胡蝶の夢かもしれないけれど、女の子といちゃつきたいと心から思った。

ユズは忘れていた。

女の子といちゃつきたいとしか考えてなかったのだ、

村が襲撃されることを忘れていたのだ。

ネカネ姉さんが魔法学校から帰ってくる日、
いつも通り、ネカネ姉さんのお尻を追っかけていたら、
村が悪魔に襲撃された。

なんやかんやで、ネカネ姉さんのお尻を追っかけていたので、石化
することは無かった。

しかし、悪魔に取り付かれた。

無言で常にそばにいる”それ”は、
ネカネ姉さんやシヨタネギとの至福の入浴の時にまでついてきた。

「ちょっと、いつまで着いてくるんですか！」
私が”それ”に向かって怒声をあげる。

それを見たネカネ姉さんは、鎮痛な面持ちで優しく声を掛けてきた。

「ユズ、どうしちゃったの。何も無いところへ叫んで」

なんと！これは私にしか見えないというのか。
邪気眼か！目覚めちゃったのか！

「見えないんですか！これを！ネカネ姉さんの裸を舐め回して見て

いるこいつを！」

「ユズ、落ち着いて。大丈夫。そんな人はいないわ」

「そうだよ、ユズ。どうしちゃったの」

「ぐぬぬぬ、私が痛い人に扱われてますね。なんてことでしょう」
「そうだ、どうせ見えないのなら、村で起きたことのPTSDとして、
慰めてもらいましょう。」

具体的にはネカネ姉さんの胸で。

シヨタネギには女装か半ズボンを着てもらつかしてもらいましょう。
と思っっていたら、”それ”はネカネ姉さんの胸に飛び込んだじゃあ
りませんか！

なんてうらやましい。

「そこは、私のものです。どきなさい！」

負けじとこちらも飛び込む。ゲフツと声がしたけれど、

”それ”の飛び込みに耐えれたネカネ姉さんなら大丈夫だろう。

といつの間にか、”それ”は離れている。あんなに熱狂的に飛び込
んだのに。

お気に召さないというのか。なんと、贅沢な。

「ねえ、ユズ。いったいどんなものが見えるの？」

ふふ。ネカネ姉さんが心配しています。おっぱい。

「上半身だけの筋肉質な人です。変な髪形で変な服着ている変態で

す。

先ほど、ネカネ姉さんの胸に飛び込んでいました。なんてうらやま、けしからんのでしょうか」

「ユズ、大丈夫だよ。そんな人、どこにも居ないよ」
シヨタネギがなんか言ってる。タオルで前を隠して。

ハアハア。

こんなにかわいい子が女の子のはずがない！
って言えますね。

「ユズ、後で病院に行きましょう。ね。」

みんなして、可哀想な顔で見えてくる。
ふふ、もつと見てください！

あれから、”それ”がどういうものか分かった。
おそらくスタンドだ。

スタンド。

たしか、前世の漫画では超能力を絵で表した存在だった。

そう確信したとき、早速、カメラを持って脱衣所に行ってもらった。
もりだった。

しかし、すり抜ける。

このスタンドは、物体に影響を及ぼさないのか？

つまり、スタンドで盗撮はできないのか。

よし、名付けよう。

たしか、ジヨジヨ4部はバンド名から名付けられていたはずだ。

L e d Z e p p e l i n

イギリスのロックバンド。

l e a d は鉛。ツェッペリンは飛行船。

鉛の飛行船は、落ちてしまう出来損ない。

役に立たないスタンド名にはぴったりだろう。

2話目 スタンドはもう出ないかも知れん

ユズには魔法の才が無かった。

ネギがスポンジのように知識を吸収している横で、
低空飛行をしていた。

この魔法学校は、結界に守られたイギリス山村の中にあり、
生徒はそれほど多くない。

授業はこの能力と希望により振り分けられ、担当の教師が訓練を
する。

少人数制の授業形態である。

最初はネギと同じ授業を受けていた。

攻撃魔法もネギと習ったが、魔法の射手で習うのを止めた。

嫉妬している。

周りの才能が羨ましい。

6歳の誕生日。

初等クラスのユズは、いつものように授業の足を引っ張っていた。

兄のネギはすでに中等クラスで、魔法の才を見せている。

授業が終わると、ユズは結界から出て山の中を歩く。

疎外感。ここにいていいのかと思うことが、多くなった。

「今から、おまえに魔法の射手をつつてやる」

それは、前に攻撃魔法の授業と一緒に受けた生徒。

あ…ありのまま　今　起こった話を話すぜ！

『山の中を歩いていたら、

魔法の射手の的にされていた』

催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もつと恐ろしい魔法の片鱗を味わったぜ…

とか考えてたら、魔法の射手があたった。

「ギャピツ」と声を上げながら、吹っ飛ばされる。

畜生！

私はなぶられる存在なのか。

川に落ちそうなネズミに石を投げるように、

私はなぶられるのか。

魔法の射手が、もう一度きた。

転がり、それを避ける。

いいだろう。

いま、私はネズミだ。

窮鼠、猫を噛むってことを目の前の人間に教えてやろう。

砂を握り締め、立ち上がる。

目の前の男に向かって走り出す。

魔法の射手をかわ…しきれない。

右肩にあたり、右の砂が落ちる。

しかし、左は健在。

すでに近距離。

目に向かって、投げ入れる。

「っつ、貴様！魔法使いとしてのプライドはないようだな」

そう言った男は、蹴りを放つ。

ボディに入った。転んでしまう。

「ぐ、えいこ、く紳士。なら、女に手を上げるな」

「足があたったんだよ、魔法の射手」

起き上がれない。

やばい。

左腕で防御する。

「ぐわっ！！」

「どうした。両腕はもう使えないのか」

起き上がろうと手をつくど、痛みが走る。

そこを、蹴り飛ばされた。

転がり、仰向けになる。

男を睨むが、そいつは笑っていた。

「貴様は地面に這い蹲るのがお似合いだな。今日はここで寝るがいい」

男は魔法の射手をうつた。

両腕は動かない。

だが、睨む。

絶望した顔はあいつには見せたくない！

そこに、Led Zeppelinが体から躍り出た。

防御するイメージ。それがLed Zeppelinを動かした。

魔法の射手がLed Zeppelinの右腕にあたり、掻き消える。

「「なにっ！」「」

驚きの声が二人から上がる。

男がもう一度、魔法の射手を放つ。

L e d Z e p p e l i n の突き出した左腕にあたる。

魔法をかき消すのか！

このスタンドは！

「むだだ！お前の魔法はもう喰らわない！」

「ふざけおつて！たまたま消えただけだ！」

魔法の射手をもう一度打つ男。

L e d Z e p p e l i n に守るよう、動かす。

しかし、魔法の射手がL e d Z e p p e l i n の胸にあたる。

痛みが来る。

血が込みあがってきた。

「ゲフツ！」

「くくく、何をやったか知らんが、留めておける魔法は2つまでのようだな」

その言葉にユズは光を見る。

魔法が2つ留まっていることが相手は感じている。

私には感じられないが、其処にある！

右腕と左腕。

留めれる魔法は2つまで。

「終わりだ。この出来損ない！」

なら、その魔法を相手にぶつけられる！

「オラオラオラオラってあれ？」

手ごたえを感じたのは、2発目まで。

その2発を顔に叩き込まれた男は吹っ飛んだ。

気を失っているだろう。

満身創痍になりながら、ようやく一息つけた。

Le d z e p p e l i n。それは、魔法を2発まで留めておけるスタンド。

その留めた魔法を消費して、物体に干渉することができる。

第3話 話を分割して、話数を稼ぐ

歩きたびに、両腕と、蹴られた腹と、胸が痛むが、弱音を上げる暇は無い。

全身スタボロのまま、校長室に入る。

「!どうしたのじゃ、ユズ」

「ドジを、踏んでしまい、ました。休ま、せてくだ、さい」

校長室の高そうなソファに倒れこむ。

ここなら、安全だろう。

「魔法の射手と蹴られただけです。

まさか、元クラスメイトにやられるとは、思いませんでした」

いつもの様に、だれにやられたか言う。

名前は覚えてない。

「なんてことじゃ、今すぐ、病院に連れてってやる」

「ありがとうございます。校長」

そして、疲れから眠りに落ちた。

目が覚めると、病院特有の臭いが鼻についた。

「ユズ！大丈夫？！痛いところはない？」

ネギがこちらを覗き込んで来る。

そろそろ、女装か半ズボンを着て貰いましょうか。

「ユズ、良かった。」

反対側から、ネカネ姉さんが泣きながら、顔に手を当ててくる。
胸の谷間が良いと言える！

「ネギ兄さん。すいません。あなたの誕生日でもあるのに」

「いいんだよ、ユズが無事なら。はいこれ、誕生日プレゼント」
さすが、英国紳士です。この優しさを求めてたんです。
可愛い髪留めです。

「ありがとうございます。ユズは嬉しいです。」

「ユズもネギ兄さんにプレゼントがあります」

そういつて、懐から一枚の写真を取り出す。
最後まで死守できた。

ナギ・スプリングフィールドのプロマイド。
ファンクラブの教師から、取り寄せてもらったものです。

「わあ、父さんの写真だ！」

アルバムなどは村の襲撃で一つも無い。
だから、ナギを目指しているネギにこれを送った。

しかし、喜んでいるネギは良いシヨタですね。
女性は勿論、シヨタもいけるようになるなんて、
人生、どうなるか分からないものです。

校長先生が見舞いに来た。

昨日の内容を聞きに。

「彼は特別扱いされているお主が、嫌だと言っていた」

「そうですか」

確かに、魔法が苦手なくせに、
色々見逃してもらっていたかもしれない。

「それで、魔法の射手を打たれたのじゃな」

「ええ、返り討ちにしましたけど」
ふふふ、と笑う。

L e d Z e p p e l i n にシャドーボクシングをさせ、喜びを表す。

「相手が少し気になることをいったんじゃが、
魔法が消えたかと思ったら、留まったとか」

なるほど、だから校長は心配そうなのか。
魔法無効化能力なのかどうか、不安なのだろう。

もしかしたら、早めに麻帆良学園に行けるかもしれない。

「私も魔法が消えたように見えました。まるで、魔法無効化能力ですね」

魔法無効化。その単語を聞かせると、校長は焦りだした。

「ははっ、そうか。まあ、そうじゃったら、魔法の射手は当たらなかったのう」

「そうですね、魔法無効化能力に目覚めれたら、良かったですね」

ふふふ、焦っている。もしかして、目覚めたのではないかと。血統的には、おかしくないからな。

ここで叩き込む！

「校長先生、私、魔法学校辞めようと思います」

「なんじゃと!!」

「ネギ兄さん比べると、いえ、他の方比べると魔法の才能が無いです」

”火よ灯れ”や”魔法の射手”なら、呪文を唱えて発動できる。しかし、今はそれだけだ。

障壁や回復などは3回に1回しか成功しない。

「これ以上、ついていけないと思います」

「しかし、じゃな…」

安全のためにこのメルディアナ魔法学校にいるのは、知っている。
その学校でクラスメイトから、襲撃されたのだ。

「魔法のことで馬鹿にされない、安全な学校に行きたいです」

涙を流す。

孫の涙だぞ、校長先生にクリティカルヒット。

「ネカネ姉さんやネギ兄さん、アーニヤ姉さんには、まだ言ってます。
せん。」

ですが、話し合って、認めてもらおうと思います」

「おじいちゃん、私、魔法の才能がありません。

だから、家族に嫉妬する自分が嫌なんです。皆優しいから、傷つけてしまいます」

「う…うむう」

「ですので、おじいちゃん。安心できる学校を紹介してください」

「勝ったッ！第3話完！」

「何をいつているのかしら、ユズ」

ネカネ姉さんが怒っている。

「そうだよ、学校辞めるなんて駄目だよ」

シヨタネギも心配してくれている。

「あんた、馬鹿じゃないの！学校辞めてどうするの！」

アーニヤもプリプリと怒っている。可愛い。

ここには、ネカネ姉さんとアーニヤ姉さんしか、胸を触れない。
しかし、麻帆良学園なら、女の園がある！！

絶対に話は通す！

第3話 話を分割して、話数を稼ぐ（後書き）

主人公の名前、変えようかな

4 話 目 千雨との都合の良い出会い

2001年 1月

あれから約1年。

日本語を覚えたユズは、校長先生お勧めの中学校に編入することになった。

麻帆良である。

そして、麻帆良に着き、道に迷った。

世界樹の大きさに見惚れていたら、道が分からなくなっていた。

おおっと。

ちょうど良いところに、ランドセルを背負った年上の女子が歩いているではないか！

「すみません。道を尋ねてもよろしいですか」
冷めた目で、こちらを見る子。

「すみません。急いでいるので」
急に急ぎ足になった。

「まあまあ、そう言わず」
逃げた子の腕をがっしりとつかむ。

「（つち、また非常識な奴かよ）」

「いやー、田舎から出てきたので、心細かったんです。
いやね、ウェールズにある村から。」

あつ、ウェールズつてのは、イギリスにある地名だね」

「あー、はいはい。分かりましたから。何処行きたいんですか？」

「麻帆良学園本校女子中等部です。今年の春から、中学1年生になるんです」

えっへん！と無い胸を張る。

それを聞いた子は、「狂ってやがる」と呟いた。

「あれゝ、もしかして私が小さいから、信じてませんか。これでも気にしてるんですよ」

「ああ、すみません。同い年に見えませんでした」

「おお、つまり、あなたも今年の春から中学生ですか。

もし一緒の学校なら、よろしくお願いします。先ほどの中等部に入ります」

「私も同じです。……ええ、もし同じならよろしくお願いします」

「お名前を伺ってもよろしいですか。

私、ユズ・ジョースターと申します。

ユズと呼んでください」

「（よばねーよ）長谷川千雨です。ジョースターさん」

「ああ、ユズと呼んでください。ジョースターは偽名なので」

春野柚子でも良かったが、せっかくスタンドを持っているので、ジョースターにした。

春野柚子って、顔でもないことも理由の一つだ。

「（偽名？！おかしいだろ！ぜってー近づかねー！）ええ、ユズさん」

目論見通り、長谷川千雨だった。

ちうタンのホームページはあるのだろうか。

「にしても、聞いたとおりの所ですね、日本は」

「聞いた通り？なんて言われたんですか？」

「日本には、侍がいて、忍者がいて、

科学が発展してて、ロボットがたくさんあるって聞きました。

ロボットはまだ見てませんけど、侍と忍者に感動しました」

「いえ、侍と忍者はいませんよ」

「え、ああ、日本の秘密ですね。侍と忍者はもういない。

はい、大丈夫です。言いふらしたりしません！」

「（おいおい、麻帆良の所為で日本が勘違いされてるぞ）」

千雨さんは呆れ顔でこちらを見てくる。

さあて、驚かせて見ましょうか。

「もっと、感動したのがあの樹ですね。

皆さん、当たり前のようにあの樹を信仰してますね。

私、驚いてしまいました」

「！あれに驚いたのか」

「ええ、樹に神様が宿るといふ日本の信仰ですよ。あとで、お参りに行きたいです。」

「お参り……、そういえば、あれを奉っている神社が無い。龍宮神社は違うし……」

「またまた、おかしいでしょう。あんな大きな樹を奉っていないなんて」

「おかしいよな！……いや、なんでもない。おかしくなんかない」

「田舎の山奥から出てきた私にとっては、全てが不思議ですよ」

「不思議。」

（おかしい奴だ。だけど、おかしいと感じている奴だ）

そうだ。もし良かったら、後で電話してくれないか。これが、家の電話番号だ」

「電話……！おお、先生の部屋にしかかったあれですか」

「（電話も使ったこと無いのかよ。すげー田舎出身だな）」

「ふふ、これで私たちは友達ですね、千雨さん」

「あ、…そうなるのか？」

「はい、友達です。よろしく願いします」

その後、ユズが判る道に出たことで、二人は分かれた。

学園長の後頭部は伸びていた。

あれが、百万人に一人と聞く仙人骨というものか。

「初めまして、近衛学園長先生」

「ふおおおお、よく来たのう。ユズ君」

「この度は、私のわがママを聞いてくださり、ありがとうございます」

「良い良い。日本で学びたいという意志を持つユズ君なら、大歓迎じゃ。」

「どうかな、麻帆良は」

「はい、町並みが綺麗ですごく良いところです。友達も早速出来ました」

「そうか、よかったのう」

「もし、わがママが叶うなら、その子と一緒に学校に通いたいです」

「ふおおおお、そうお願いされたら、仕方が無いのう」

「長谷川千雨さんという6年生です。」

ユズ・ジョースターという名前で通わせてください。」

今まで好々爺だった学園長は、ピクリと眉を動かす。

「通うのは良いんじゃないが、ファミリーネームを偽るのは何故かね？」

「スプリングフィールドの名前ではなく、私を見て欲しいんです。それと、身を守るためです」

「そうか、それならしかたないのう」

魔法使いとしての才が無いのなら、隠しておいたほうが良い。その連絡も言っているはずだ。

「はい、よろしくお願いします」

「うむ、次はホームステイ先なんじゃが……」

次の日。

「イギリスから来ました。ユズ・ジョースターです。」

短い間ですが、よろしくお願いします。」

千雨のクラスに、転校生がやってきた。

5 話目 クラスメイトとの出会い（前書き）

茶々丸の起動日は2001年4月1日

5 話目 クラスメイトとの出会い

桜咲く春。

麻帆良学園中等部の入学式。

隣には同じルームメイトの長谷川千雨が座っている。

運命的な出会いをしたので、学園長に頼み、
できるだけ一緒にするようにして貰った。

ちなみに、ザジ・レイニーデイも同じルームメイトである。

千雨とは、この4月から始まった日曜の朝アニメ、
魔法少女ビブليونと一緒に見る仲である。
せっかく女性になったことだし、アニメの服も着てみたいとユズは
思う。

入学式はつつがなく終わり、教室に戻る。
この教室は3年間使うので、大事にするようにとタカミチ先生は言
う。

マジかよ。教室替え無し。

私立はすごいなあ。

しかもこのクラスは相坂さよという子が居る為、
席替えは無かったはずだ。

まあ、千雨の後ろの席だからよしとする。
一応、出席番号は32番である。

番号を割り振ってから決まったということになっている。

「おお、さすが日本。ロボットがいるぞ、千雨」

私の感嘆の声を聞いて、千雨はがくつとうなだれる。

二つ右隣の絡繰 茶々丸をみて、「ありえねえ」と呟く。

「ASIMOはすごいと思っていたけど、日本はこんな技術を隠していたのか。」

しかも、侍、忍者もいる。うん。日本の心だね」

「いや、違うぞ。それは違う」

千雨は私の価値観をどうにかして麻帆良に染まらないよう、頑張ってくれている。ありがたい。

おかしなものに反応するだけで、千雨が構ってくれるのだ。

「わかってるって。麻帆良は秘密結社でしょ。内緒にする」

「ああ、うん。（これは中2病なのか？いや、でもおかしいと思うっているし）」

「でも、サインくらいなら良いよね！」

「待て待て待てーい！」

「良いか、あんなおかしな奴らとは関わらないほうが良い」

「んー、おかしい人たちだから、サイン貰いたいんだけど」

「駄目だからな。ほら、帰るぞ」

「あ、ちょっと待って。同じ留学生のような人に挨拶してくる」

「ああ、そうか？」

スタンドを久しぶりに出す。
体から2 m以上離れられないので、近づくしかない。

「あのー、もしかして留学せ」

エヴァンジェリンに向かって、右ストレート。

「な、なんだ？！」

「ふえっ」

エヴァンジェリンがいきなり声を上げたので、驚いたように見せておく。

おお、登校地獄がLed Zeppelinの右手に。
それをエヴァンジェリンにお返しする。

「なく…なつてない！なんなのだ。今のは！！」

「ごめんなさい」

怒った声を聞き、反転して戻る。エヴァンジェリンはこちらを見向きもしない。

登校地獄を解いたら、エヴァがここから居なくなるかも知れない。
最強の警備員がいる必要があるから、呪いを掛けられたはずだ。
学園の地下とか、神楽坂 明日菜とか、重要な要因を守るためだろ
う。

よし、逃げよう。

「やつぱ、明日でいいや。さあ！腕を組んで帰ろう」
「やめい！」

千雨と腕を組みながら、帰路に着いた。

「いま、エヴァンジェリンの魔力が少し戻ったネ」

「そうなのですか？……はい、計測機にデータが取れていました。
詳しくは、茶々丸のデータを確認する必要があります」

「エヴァンジェリンヲ見てたのはだれネ、それを確認するヨ」

超が気になったのは、近くにいたユズ・ジョースターという女生徒。
未来の記録に一切存在しない人物。

「いいなあ、魔法少女。なつてみたいなあ」
ユズは魔法少女ビブليونを見終わった後、そう呟いた。
千雨の方をちらちらと見る。

「中2病には、ならないでくれよ」
千雨がため息をついながら返す。

「よし、そこまで言われちゃしょうがない。
ノートの表紙に長谷川千雨って書いて、
私の考えたカッコいい呪文を載せまろう。」

「やめろ！馬鹿！」

あはは。千雨は楽しいなあ。

「あゝあ、せめて格好だけでも良いから、なって見たいなあ」
千雨の動きが止まる。

まだ、この部屋にはコスプレ衣装は無い。
ちうのホームページも無かった。

だが、興味はあるはずだ！

「ユズはあの服を着てみたいのか？」

「はい、カッコ可愛いです。ママ！」
敬礼をしながら、答える。

「じゃあ、買ってみる、か？」
おずおずと、千雨は尋ねてくる。

「ふふふ、3万円までなら出します」
めがねをクイツと上げる動作をする。エアメガネである。

「そうか、買うか」

「千雨と同じ体形なら、着まわしができるのに。はあ、小さい体が
憎い」

「いいじゃないか、小さくても。需要はあるぜ」
くくつ、こちらを見て笑う千雨。

「これが勝者の余裕か、なんてプレッシャーだ」

「実際、私と同じくらいなのは、エヴァンジェリンさんや鳴滝姉妹くらいですね」

7歳の私と13歳のが、同じくらいの背というのは、どうなのか。7歳にしては、私は大きいからまあ、いいか。

「なんだ、もう名前覚えたのか？」

「三分の一は覚えました。サイン貰うのに、必要ですから」
一般人以外はすでに覚えている。

「よし、名前を言え。そいつ等以外と付き合えば、安心なんだな」

「ええー、サイン貰いましょうよ。
付加価値ですよ。運動部に入ったら、国体でれますよ。あの人たちなら」

「いらん！そいつらに覚えられるより、心の平穩のほうが大事だ！」

ぎゃあぎゃあ言いながら、楽しく過ごしていった。

ユズ・ジョースターの麻帆良でのスタンスはこうだ。

公式記録に残る物は、全て避ける。

アルバムに載せるクラス写真、

体育の校内記録、表彰式があるかもしれないもの。
クラス名簿だって、シールで対応させている。

護身のためであり、超に疑われたくないからである。

ここにいるのは、ユズ・ジョースターであり、ユズ・スプリングフ
イールドではない。

そして、それは卒業後、一切残らない。

しかし、公式記録以外なら別である。

千雨と一緒にコスプレ写真をとることだ。

ちうのホームページには、ユズの写真は決して乗らない。

千雨はPCに保存し、ユズは現像して、アルバムにしている。

千雨オンリーのアルバムと、二人で一緒にとった写真である。

千雨を撮ることにより、カメラ技術もあがってきた。

これはきつと、今後の千雨盗撮計画に役立つだろう。

ちうのホームページのチャットの住人にもなれた。

多分、気付いていないはずだ。

ザジはほとんどサーカスで寝起きをしているので、余り帰って来ない。
い。

ザジは大きな声では喋らないが、
千雨が長女、ザジが次女、ユズが三女のようになり、
もっと、賑わうようになる。

いつまでも、こんな生活が続いて欲しい。

そう思いながらも、もう一つの思いが、芽を出してきた。

長谷川千雨の恋人になりたい。

自分の意識ははまだ男である。

二次成長の終わった宦官が、強姦を犯すように。

二次成長の終わった意識は、何をもつてしても、女性の意識にはならないのである。

本命は女である。

シヨタはいけるが、男はいけないのである。

一度、意識をしてしまうと、四六時中、目で追ってしまう。

この思いは、伝えてよいのか？

千雨はおかしいものを嫌う。

女同士は、そのおかしなものに入るのではないか？

そうした思いが、心に積もり始めた。

5 話目 クラスメイトとの出会い（後書き）

オリジナル設定追加

登校地獄でも、魔力が少しだけ制限されていることに

6 話目 昇天ペガサスMIX盛り（前書き）

今日明日中に更新ができなきゃ、
次の更新は、9月です。

6 話目 昇天ペガサスMIX盛り

100年前の資料が全て正しいのか。

人から聞いた話で、全てのことが分かるのか。

自分の目で見ても見落としが産まれてしまうのに、

他人の資料や記憶を全て正しいと思うことは、

科学者である超にはできない。

前提条件を疑い、

それが、自ら正しいと判断できたとき、新しい科学は作られるのだ。

よって、

存在しない32番目のユズ・ジョースターという人物がクラスに居たからといって、

いきなり、行動を起こすわけにはいけない。

じっくり正確にすばやく資料を嘗め回し、

あの人物が誰なのかを確認する。

超はTorに提供したデータサーバにその答えを見つけた。

Torは、世界各国のボランティアたちが寄付したサーバーを使用し、

トラフィックを送信する際、

無作為に選ばれたサーバーを経由させることで、接続経路の匿名性を実現する。

通信経路上では、メールの復元は出来ない。

しかし、通信内容の秘匿化を行うものではない点に注意が必要である。

そして、経路の出口では、メールは復元される。

それを知らない馬鹿な外交官が、平文でメールを送り、よく機密を漏らしていた。

ユズ・ジョースターもその一人で、
ユズ・ジョースターは、ユズ・スプリングフィールドということが、
ユズの隠したいという思いから、暴かれてしまった。

「どうに力、しなければならぬネ」

匿名性を気に掛けてメールを送る。

集合写真は撮らない。

成績も平均的。

身体能力は普通。

魔法の力もなさそうな、

長谷川千雨と仲の良い、普通の子。

もし、スプリングフィールドでなければ、捨て置いた存在。
だが、捨て置けない。

家系図にも存在しないスプリングフィールドの血は、
確かめなければならない！

よって、超は吸血鬼を動かす。

登校地獄を一瞬でも解いた存在を探していた。

勝手に解かれる呪いではないことは、12年間で十分、身にしみて
いる。

茶々丸のデータを解析したところ、「ユズ・ジョースターが怪しい
ネ」と囁くだけで良い。

後は、エヴァンジェリンの行動を待ち、
従者である茶々丸のデータを調べればよい。

ユズは発動体の指輪をつけ、
魔法の練習を隠れて行いながら、
千雨とも遊ぶ日々を過ごしていた。

Led Zeppelinのおかげか、魔力というのが、なんとなく
く感じられるようになった。

そんなある日。

食堂で、千雨と日替わり定食を食べながら、
「次クールのお勧めアニメとその動向による市場の変化」について
おしゃべりしていたときだ。

「ジョースターさん。お隣宜しいですか？」

エヴァンジェリンが猫をかぶりながら、聞いてくる。

たまに、高笑いしているので、ちょっとおかしい幼女として千雨に
認識されている。

千雨の顔を見ると、明らかに嫌そうな顔をしている。
後ろに付き従っているロボ娘の茶々丸が嫌なのであろう。

「すみません。マクダウエルさん。千雨は金髪幼女を見ると、過呼吸を起こしてしまうので」

ちなみに、エヴァよりも薄いのが、ユズもどちらかというと金髪である。

「あら、そうだったんですか。ジョースターさんの髪は大丈夫なのですか？」

「ええ、私の身長は131cmなので、130cm以下がいけないみたいです」

千雨が「どんな症状だよ」と呟くが無視する。

追い払うために、こうしているのだ。千雨が突っ込むことはない。
だから、突っ込まれるまで、待つしかない。

「ですので、髪型を昇天ペガサスMIX盛りにすれば大丈夫です。
絡繰さんができるのならの話ですけど」

従者を暗に貶す風に言う。

「マスター、要望があればいつでも出来ます」

できるのかよと、千雨が小声で呟いた。

ちっ、まだ小声か。

10分後、そこには、元気な姿で席に着く昇天ペガサスMIX盛りが！

「ぷすう、ぷふふ、ぶふっ」

千雨がエヴァンジェリンを見ながら、笑いを堪えている。

「ああ、長谷川様が過呼吸を起こしてしまいました。大丈夫ですか？」

茶々丸が千雨を心配

「だいじょ、うぶぶふっ」

「マクダウエルさん、これから留学生同士、仲良くしましょう。私のことはユズと呼んでください。ジョースターは偽名なので」

右手を差し出しながら、握手を求める。

接触してきたということは、すでにばれていると考えられるから、偽名であることをばらしても、痛くない。

「あら、偽名のですか？教えて頂けなければ、握手はできませんね」

スプリングフィールドと言っても良いが、右手を口元に持っていていき、

「禁則事項です」

「（うぜえ）」

その後は、日本三名園の話振った。千雨はずっと、笑いを堪えていた。

もっと、日本の景色について話をしようとエヴァ邸に誘われ、それを承諾した。

それなのに、エヴァンジェリンはやってはいけないことをした。
帰り道、ユズの目の前で、

茶々丸が千雨をさらっていた。

「どうぞ、お入りください。ユズ様」

玄関を開けると、茶々丸から銃を突きつけられた。

「申し訳ありません。マスターがお待ちしております」

リビングに通されると、エヴァンジェリンがソファにふんぞり返っていた。

髪型はすでに元に戻っている。

「さて、貴様がユズ・スプリングフィールドだということはすでにわかつている」

「千雨はどこに？」

エヴァンジェリンは指を鳴らすと、茶々丸が千雨を抱いてつれてきた。

茶々丸がエヴァンジェリンの隣に寝かせた。
千雨は意識を失っている。

「これからするのは、交渉ではない」

エヴァンジェリンは笑い、牙を覗かせる。
今夜は満月だったことにユズは気付く。

「貴様は”はい”か、”Yes”で答えろ」

「嫌だね」

ユズは自分の爪を見ながら、明日のマニキュアは何にしようかと考えながら、答えた。

「ほう、私が誰か分かってないようだ」

エヴァンジェリンの眼光が鋭くなる。

「吸血鬼の真祖にして歴戦の最強の魔法使い。
ハイ・デイトライトウオーカー
ダーク・エヴァンジェル
闇の福音、

不死の魔法使い（マガ・ノスフェラトゥ）、

人形使い（ドール・マスター）、

おとずれ
悪しき音信、

禍音の使徒、

童姿の闇の魔王」

ユズは指のささくれをいじりながら、一気に答える。

「それを知りながら、なぜ？」

「動物園の檻の中のグリズリーを怖がる子供がいるか？

いなアアア〜いッ！」

「キ、キサマアアアア！」

エヴァンジェリンが飛び掛る。

ユズは観察をしていた。

千雨からは、吸血鬼の魔力の残り香なんて、感じられない。

そしてエヴァンジェリンからも、魔力はほとんど感じられない。

だからこそその挑発。

相手はただの10歳。

「ぶへっ」

ユズは吹っ飛ばされた。

こちらは、7歳。

相手は吸血鬼の牙が生えた10歳だった。

「おやあゝ？グリズリーに驚いたのかあ？んゝ？」

エヴァンジェリンは机に片足を乗せ、こちらを伺う。

ユズは軽い脳震盪になりながら、

パン 2。見え
を行った。

「くくくくく、どうやら貴様はただの馬鹿らしい。茶々丸！こいつを別荘に案内しろ！」

「はい、マスター」

茶々丸に捕まえられ、球体のガラスボトルのある部屋まで連れて

行かれる。

ユズはこれを知っている。

ダイオラマ魔法球。

この中は、学園結界の範囲外！

ヤバい！

もっと後に出てくる魔法具なはず！

そう思ったときには、景色が変わっていた。

7話目 戦闘シーンすぐ終わりすぎワロタ

「残念だ、非常に残念だ」

起き上がる暇を与えられず、エヴァンジェリンに頭を足で抑えられる。

「私たちは仲良くなれたのではないのか」

ユズはエヴァンジェリンに蹴りを放つ。

造作も無く足をつかまれ、吸血鬼の力と柔術で投げ飛ばされる。

受身すらとれない。

「がはっ！」

むせる。

呼吸がおぼつかない。

「貴様の行動の結果がこれだ」

つまらなさそうに、制服を投げる。

赤く染まっている。

茶々丸の物？

違う、そんなことする理由が無い。

なら、それは。

「きさ、ま、ほこりあり、かう」

ユズが「誇りある悪」と言い終わる前に、エヴァンジェリンが前にいた。

そのまま、首をつかまれ、立たされる。

その手に両手で爪を立てるが、いっこうに離れない。

「どうした？長谷川を殺したのがそんなに不思議か？」

違う。

やるはずが無い。

エヴァンジェリンが殺す理由が無い。

面倒なことが多くなるはずだ。

これはブラフだ。

だけど、もし。

本当に殺されていたら？

もう一度、蹴りを放つ。

反対の手で、その足をつかまれる。

だからこそ、反対の足で蹴りを放つ。

しかし、届く前にまた、投げ飛ばされていた。

「光の精霊1柱！集い来たりて 敵を射て！ 魔法の射手！」
唯一の攻撃魔法を唱える。

指輪から魔法を放つ。

しかし、それはエヴァンジェリンの障壁で、かき消された。

エヴァンジェリンが苛立ちの顔をする。

「まさか、その程度で、私に喧嘩を売ったのか？
私のことを知りながら、その程度で、私を馬鹿にしたのか？」

それを言うと、エヴァンジェリンが消えた。

「もういい」

「あああああああああああ！」

目の前には、腕を持ったエヴァンジェリンがいる。
それから出る血を美味しそうに、舐め取っている。

「プ、ラクテツ！ ビギ・ナ、ル “火よ灯れ”」
途切れ途切れに呪文を唱える。

その火を無くなった部分にあて、焼く！

「ぎゃあああああああああ！」

肉が焼ける香ばしく、美味しそうな匂いが、あたりに充満する。

「うむむむ~~~~んんんんん 予想どおりスプリングフィールド
の血はなじむ」

血の味の感想を言い、また、舐め始める。
舐めるにとどまらず、すでに吸い出している。

そして、腕を投げ捨てた。

「この肉体に実にしっくりなじんで　呪いが解けたぞ！
なじむ　実に！　なじむぞ　フハハハハハ　フフフフ　フハフハフ
ハフハ

これほどまでにツッ！絶好調のハレバレとした気分はなかったなア……
フツフツフツフツ　スプリングフィールドの血のおかげだ　本
当によくなじむツッ！

[illegible]

熱い、痛い、眠い。

エヴァンジェリンを睨むことすらできなくなりそうだ。

「おやあゝ、治療はすんだか？
 おお、なんと痛々しい！ いったい、だれがこんな酷い治療をしたのか！」

「ふふふ、ははは、アハハハハ」
ユズは笑った。心の底から笑った。

「ああ、壊れたか」

「こわれくたゝ？いいや、ちツがーう！
どおーやってイジメてやるオカアゝってことを考えておつたんだぜ

くくく！

はだかにひんむいてやるか！

それとも、その鼻をつまんで泣かしてやるか…

どっちがいいーん！？」

「もういい、貴様はもう用済みだ
生まれ変わった私の魔法の的にしてあげよう。特大でだ！」

「契約に従い（ト・シュンボライオン）

我に従え（ディア・コネート・モイ・ヘー）

クリュスタリネー・バシレイア
氷の女王

来れ（エピゲネーテートー）

とこしえの（タイオーニオン）

やみ（エレボス）！

えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリュスタレ）！！」

ふう、さつさと魔法を撃って欲しかった。

もつと、馬鹿にすれば良かったか？

左腕を失ってしまった。

まあ、いい。魔法は撃たれる。

千雨の無事を確認するまで、この私が止ることなど、ありえない！

「Led Zeppelin！」

150フィート四方の空間をほぼ絶対零度にできる魔法。
それを、一点に集める。

Led Zeppelinに！力が集まるのが分かる！

「何…だと…？」

そして！

圧倒的な魔力の塊を、エヴァンジェリンの障壁に叩き付け！打ち破る！

「しまっ」

エヴァンジェリンの氷像が出来上がった。

「さむっ」

エヴァンジェリンの後ろに、氷原が広がっている。

「まずは、1日、生き残らなきゃ」

ゆっくりと立ち上がり、建物へ歩みを進める。

「千雨、大丈夫だよな……」

「マスター！」

茶々丸が魔法球の中に入ってきた。
魔法球を見守るように、言われてたのだろう。

だが、一瞬の逆転に、優先順位が変わったのだと思う。

「ユズ様」

茶々丸が銃を向けてくる。

両手を挙げ、その場に止まる。

「千雨は無事か？それと、早く溶かしたほうが良いんじゃないか？」

「長谷川様は無事です。失礼します」

言っやいなや、茶々丸はすぐに行動を始めた。

「あゆ、おい」

まだ、聞きたいことはあったが、今は無理だろう。

茶々丸は忙しそうだし、

こちらは、手当てし直さなければならない。

エヴァンジェリンの応急処置が終わった後、
こちらも茶々丸に応急処置してもらった。

エヴァンジェリンには驚異的な回復力がある。
もう大丈夫だろう。

「だから、”登校地獄”を食らえ！」

エヴァンジェリンが血を飲むときに吸い取った、登校地獄を返す。

茶々丸や戦っていたエヴァンジェリンは、何らかの魔力は感じていたはずだ。

スタンドと一体化していたので、

ユズから感じていたが！

1日が経ち、魔法球をでる。

エヴァンジェリンはまだ眠っていたが、すぐに出てくるだろう。

今は！

制服を脱いだ千雨に会う方が大事だ！

戦闘結果

ユズ・スプリングフィールド

左腕欠損

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
なにも変わらず

7話目 戦闘シーンすぐ終わりすぎワロタ（後書き）

次の更新日は9月です

吸血鬼だから、この台詞を出したかった。
最高に「ハイ！」ってやつだアアアアア

8 話目 久しぶりの投稿で物語の流れが分からない回（前書き）

吸血鬼に「最高にハイってやつだ」をやらせたかった。

今回の話は、その状態からまともな方向に持っていきたいです。物語の流れがおかしかったら、そのときはまあ、そのときです。きつと改定する

8 話目 久しぶりの投稿で物語の流れが分からない回

千雨は無事だった。

エヴァンジェリンのはったりで良かった。

制服の赤は、血ではなかった。
血を吸われてもいない。

タオルケットに包まれている千雨を見て、ようやく安心した。

ソファに横たわっている千雨。
起きそうにも無い。

鎮痛剤を使っているが、痛みは感じる。
だが、その痛みのおかげで、目の前の千雨に飛び掛ることは無かった。

まずは、病院へ行き、本格的な治療が必要だ。
「学園長室に行かなきゃ」

病院代は払えないし、何も追求されない病院も知らない。
なら、学園長に紹介して貰うしかない。

学園長室は複数有り、麻帆良中等部にその1つがある。
中等部までの長い道のりをゆっくりと歩いていった。

左腕は制服ごと挟り取られている。
茶々丸によって応急処置はされたが、公然と見せるものではない。

よって、エヴァンジェリン宅にあったタオルケットで、その部分を隠していた。

「アイヤー、ユズさん。その腕どうしたネ」

超がいた。

チャオ・リンシェン
超 鈴音。

勉強・スポーツ・お料理、何でもござれの無敵超人。

茶々丸プロジェクトに関わっていたことから、2001年1月3日
までには、

未来から現在に来ていることになる。

ユズが敵対したくない人物の一人。

「魔法を世界中に認識させる」という目的で未来からやってきた。
漫画の知識では、「世界平和」の認識でも目的は達成されたと言っ
ていたので、「魔法の認識」は表向きの理由だろう。

敵対する必要が無い。むしろ、邪魔をしないほうが良い。

今接触されたのは、茶々丸からの通信か、もしくは、監視されてい
たか。

ユズが懸念事項なのだろう。

未来に存在しない存在。

だから、未来の記録に存在していなくても、おかしくないように行
動しているのだ。

「超さん、良いところに。怪我して左腕が無くなったんですけど、
良い病院知りませんか？」

「あつさり言うネ、大丈夫力？」

「ええ、茶々丸さんが応急処置してくれたので、義手も作れて、お金を学園長に請求できるようにしたいです。超さん、物知りだから知りませんか？」

「いくらワタシでも知らないネ」

ありゃ、超さんでも知らないのか。どうしたものか。

「でも、知らないなら、作れば良いネ。欲しいなら作る。ワタシ、顔広いから、大丈夫ヨ」

いくらなんでも、義手は無理だろう。とユズは考えていた。と思っていたら、連れ回され、あれよあれよという間に、義手を受け取る算段がついた。同時にしっかりと左肩の切断面を診てもらった。

切断端が完全に治癒したら、義手をつけてくれるらしい。

こんなにも素早くできるなんて超様様である。1日も経っていない。

「イヤー、危なかったネ。一步間違えれば、死んでたヨ」

超のツテで、切断面の治療をもらったときの言葉だ。茶々丸の応急処置が無ければ、死んでいた可能性がある。

出血多量。痛みによるショック死の可能性もあった。焼いたのもいけなかった。

切断面が酷いことになり、痛みがあり、綺麗にはならないはずだった。

麻帆良じゃなければ、超さんじゃなければ、義手すら付けられなかったかもしれない。

「ありがとうございます。超さん」

「良いネ。困ったときはお互い様ヨ」

「超さんが困ったことになるのは想像できませんけど、そのときは力になります」

「そうネ、そのときはお願いするヨ」

颯爽と去っていく超さん。いや、超様。

尊敬と憧れの念をユズが抱いても、おかしくは無かった。

「エヴァンジェリンさん、いませんか」

そう言いながら、エヴァ宅の玄関を開ける。

再び、ユズはエヴァ宅を訪れたのだ。

鍵がかかってない。茶々丸はまだ魔法球から出てきていないのか？
千雨の靴が無いから、茶々丸が運んだと思ったんだが。

「いらつしゃいませ。ユズ様。どういったご用件でしょうか？」
少しすると、茶々丸がやってきた。

となると、エヴァンジェリンの治療は終わったと見てよい。

「エヴァンジェリンさんと、お話の続きがしたくてきました」
茶々丸は少し停止した後、「どうぞ、こちらです」と案内してくれた。

念話は便利そうだなと思いながら、ユズはついて行った。

「よく顔を出せたな、ユズ・スプリングフィールド」
通された部屋に入ると、エヴァがベットから上半身を起こしてそう言った。

まだ、本調子ではないのか。

魔法球から出たのは、魔法球の中の薬が切れたのだろうか。

「はい。今もエヴァンジェリンさんは怖いですし、憎くもあります」
無くなった左腕の方を見せ、怒ってみせる。

言うほど怒ってはいない。怒りは千雨を巻き込んだことぐらいだ。

「貴様の腕が無くなったのは、自業自得だ。
あれほどの魔法を操れるのに、それをはじめからしなかった貴様が悪い」

エヴァンジェリンは勘違いをしている。

ユズは攻撃魔法は、魔法の矢しかはなてない。

他の基本的な魔法は、勉強中である。

「それで、エヴァンジェリンさん。私の血を飲んで満足しましたか」
話を切り替える。スタンドの説明をしても良いが、今はめんどくさい。

「いいや。満足などできるものか」エヴァはため息をつき、

「貴様の父親がかけた登校地獄！
その所為でこの私が12年も同じ中学校に通わなければならない！
今年で13年目だ！」

エヴァンジェリンがゲホゲホツと咳き込む。
魔力を使った後に、登校地獄が再びかかったから、
抵抗力みたいなものが落ちたのだろうか？

「マスター、落ち着いてください」

「落ち着けるか！無くなったと思ったら、復活しているなんて！」

「私の血ではその呪いとやらは駄目みたいですな。
私、魔力が少ないですし」

エヴァンジェリンに再び狙われないよう、意識誘導する。

エヴァンジェリンは訝しげながら、こちらを見ってくる。

「そう、魔力が少ないのに、貴様は私の魔法を返した。
どう言うことだ？そんな芸当、できるはずが無い」

エヴァンジェリンが再び聞いてくる。

スタンドのことを言っても良いが、どうせなら身辺調査をしている
超さんにも伝えたい。

一回の説明で終わらしたいのだ。

「私、魔法の出力はできませんけど、操作は上手なんです」
魔法の形に出力されたものなら、スタンドで留められる事は実験済
みである。

「操作。なら、私にかかっている呪いを解くことはできるか？」

「できません」

すぐに返事をする。登校地獄をここでエヴァンジェリンから外したら、

学校に通わなくなるかもしれない。

それは、まずい。

原作から外れるのは、恐怖を覚える。

底知れぬ恐怖だ。エヴァンジェリンともう一度、戦えと言われるくらしいの恐怖だ。

次は、絶対に勝てない。生き残ることができない。

そう、思ってしまうのだ。

「私の兄がすごい魔力を持っています。

兄の方が頭も良いですし、解呪なら、兄を頼ってください」

「ほう、兄を売るのか？」

「そういう訳ではありませんが、結果的にそう見えるかもしれない
ん」

父親であるナギの話をする代わりに、対価として呪いを解いてもらえばよい。

ネギができれば、スタンドで他の生物に登校地獄を移せばよい。

「そうだ。エヴァンジェリンさん。魔法球に入らせてくださいよ」

腕を治したいんですと言うと、「ふん、いいだろう」と答えてくれた。

まだ、呪いを解く望みがあることに気を良くしているのだろう。

ユズの血を飲んで、一瞬でも無くなったと感じたこともある。

ユズの魔力が少ない所為で、呪いは完全には解けなかった。

だが、魔力が多いと聞いたネギの血なら、いけるかも知れないと考えたのだろう。

そして、それが無理なら、ユズが死なない程度に、血を採られ続けられるのだろう。

「ありがとうございます。これで、明日にも義手をつけることができそうです」

「義手？私が言うのもなんだが、そんなすぐに作れるものなのか？」

「超さんが1晩でやってくれました」

超さんが居れば、ほとんどのことは解決するだろう。

「ああ、あいつか。なら、おかしくないな」

エヴァンジェリンは一人で納得している。

超さんとの繋がりをより深くしたいが、後でも良い。

まずは、千雨に嫌われないように、この前までの自分に戻らなければ。

何日か寮にすら戻らないかもしれないが、怪我は千雨には見せたくない。

傷口を見せて、千雨に負い目を感じて貰い、同情もして貰いたい。そして、もっと千雨に見てもらいたい。

そんな考えも戦闘中にあつたが、いざなってみると、千雨に嫌われるかもしれないという思いがあり、怖くなった。

魔法球の中で、自問自答をする。

なぜ、千雨に嫌われることをそこまで恐れるのか。
なぜ、原作に沿わないことを恐れるのか。

その二つは相反しているではないか！
千雨と仲良くなったら、原作には沿わない。

ウェールズから麻帆良に来たのだから、
もしかしたら精神の奥の方に、原作を歪めたくない思いがあつたからではないのか。

超さんに不審に思われないようにする行動だって、
原作からすれば、とるに値しない存在になるという思いがあつたのではないのか。

本当に私は、転生をしたのだろうか？
なぜ、こんなにも原作を怖く思い、千雨をこんなにも愛しく想うのだ？

こんな精神にもかかわらず、ユズのスタンド「Lead Zeppelin」は共にある。

スタンドすら疑い始めたが、止めた。

前世が男だろうと、女だろうと。

原作に沿うように、知らず知らずに行動してしまおうと。
ここに存在するのは確かなことである。

千雨を大切に思うのも確かだし、スタンドが存在するのも確かだ。
なら、今したいことは一つ。

千雨に想いを伝えることだ！

千雨に見て貰いたい。千雨に知って貰いたい。

そう言えば、もうすぐ麻帆良祭だ。

思いを伝えるのなら、そういう場で伝えたい。

魔法球の中で数日過ごし、義手を取り付けた。

肩の電気信号を読み取り、義手に動きを覚えさせる最新式だ。
そのリハビリの為に、また魔法球に入る。

現実時間が何日経ったか分からないが、数日たった。
リハビリも終わり、強力な左腕になった。

久しぶりに千雨に会える。

そして、麻帆良祭の約束をしよう。

今年は大発光の年ではない。

よって、本当の答えが返ってくる。

だから、ユズは千雨に告白することを決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5749v/>

魔法先生ネギま 私と千雨と、ときどきスタンド

2011年9月2日02時07分発行